

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 27 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520465

研究課題名(和文) 日本語と朝鮮語における文法化の生起要因に関する対照言語学的研究

研究課題名(英文) Contrastive Linguistic Studies on Factors for Grammaticalization in Japanese and Korean

研究代表者

塚本 秀樹 (TSUKAMOTO, Hideki)

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：60207347

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：日本語と朝鮮語における複合格助詞や複合動詞について詳しく考察すると、朝鮮語よりも日本語における方が文法化が生じている状況にあることが明らかになるが、文法化に関する両言語間のこの相違は、朝鮮語は語なら語、節・文なら節・文といったように、基本的には語と節・文の地位を区別する仕組みになっているのに対して、日本語は語と節・文が重なって融合している性質のものが存在する仕組みになっている、といった両言語間における形態・統語的仕組みの相違が起因していることが証明される。

研究成果の概要(英文)：Detailed examination of compound case particles and compound verbs in Japanese and Korean shows that they are more frequently grammaticalized in Japanese than in Korean. It can be demonstrated that this difference in grammaticalization between the two languages is caused by differences in morphology, characterized by the fact that Korean differentiates between the status of word and clause/sentence, whereas in Japanese it is possible for word and clause/sentence to exist in a fused state.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：日本語 朝鮮語/韓国語 文法化 対照言語学 複合格助詞 複合動詞 形態・統語的仕組み 文末名詞文

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者の塚本は、これまでの一連の研究で次のことを明らかにした。

日本語と朝鮮語における諸言語現象について考察すると、日本語では文法化が生じているものが比較的多いのに対して、朝鮮語では文法化が生じているものが比較的少なく、両言語間で文法化の進度の違いがあることを見出すことができる。

朝鮮語は、語なら語、節・文なら節・文といったように語と節・文の地位を明確に区別する仕組みになっているのに対して、日本語は、語と節・文が重なり合わさって融合している性質のものが存在する仕組みになっている、といった両言語間における形態・統語的仕組みの違いが導き出せる。

(2) 研究分担者の堀江は、研究代表者による研究に触発され、日本語と朝鮮語における形式と意味の相関関係について認知類型論の観点から考察を行った。その結果、特に次のことを明らかにした。

日本語では、一つの形式に複数の意味を対応させる傾向が強いのに対して、朝鮮語では、一つの形式に一つの意味を対応させる傾向が強い。

(3) 研究代表者の塚本と研究分担者の堀江は、これまで学会などで会った時には各自の研究内容について意見交換・議論をしてきたが、上記の研究は基本的にはそれぞれ別個に行われたものである。また、文法化については、これまで研究代表者の塚本が動詞表現に、研究分担者の堀江が名詞表現にそれぞれ重点を置きながら、それぞれ異なる形態・構文や現象を考察対象としてきた。

(4) 研究代表者の塚本と研究分担者の堀江それぞれによるこれまでの研究を踏まえ、研究代表者の塚本と研究分担者の堀江が常時、連携をとって相補う形で共同研究を行えば、非常に効果的な研究に結び付き、多大な研究成果を挙げることができると期待されることから、平成 19～21 年度科学研究費補助金(基盤研究(C))の計画調書を提出し、採択された。

(5) 研究代表者の塚本と研究分担者の堀江は、この研究計画に基づいて研究を進めることにより、得られた研究成果を論考で公表しており、多くの研究成果を得ることができた。その中で、両言語間における文法化の進度の違いは、さらに根本的な要因である形態・統語的仕組みの違いと強く結び付いており、これに起因した結果のものがある、ということを目指し、見込みをつけた。しかし、文法化と形態・統語的仕組みがどのように影響し合っているかといった相互関係は、残念ながら、まだ十分に明らかにされたとは言えない。

(6) 本研究は、特にこの点を明らかにすべく、

前述の平成 19～21 年度科学研究費補助金(基盤研究(C))による研究をさらに発展させて行うものである。

2. 研究の目的

(1) 日本語と朝鮮語における文法化現象には、これまでの考察でわかったものも含めて具体的にどのようなものがあるのか、ということを見出すことを明らかにし、それを整理して記述する。

(2) それらの文法化現象に関する両言語間の類似点と相違点を、対照言語学からのアプローチで明らかにする。

(3) 上述した形態・統語的仕組みに関する両言語間の相違を反映させている現象には、これまでの考察でわかったものも含めて具体的にどのようなものがあるのか、ということを見出すことを明らかにし、それを整理して記述する。

(4) これらによって指摘された両言語間の相違は何を意味し、何が要因となって生じているのか、ということについて対照言語学からのアプローチで探究する。

(5) その探究の際には、特に、形態・統語的仕組みに関する両言語間の相違が文法化に関する両言語間の相違にいかに関与を及ぼしており、また影響を及ぼしていないか、といった二者の相互関係に着目し、その実態を明らかにする。

(6) こういったことによって得られた研究成果が、さらに次の段階として本研究課題とは別に言語類型論からのアプローチで行う予定にしている研究にどのように結び付いていくのか、ということについても考察する。

3. 研究の方法

(1) 入手した言語学関係の図書・論文によって、従来、行われてきた理論的なアプローチからの考察を検討し、入手した日本語と朝鮮語に関する参考書によって、まずは記述されている範囲内でそれぞれの言語の事実を確認する。

(2) 実際に使われている日本語と朝鮮語の例を新聞・雑誌・小説などから収集し、言語事実を明らかにする。

(3) 研究代表者及び研究分担者の直感が効かない朝鮮語に関しては、それぞれの所属研究機関で入念なインフォーマント調査を行い、従来の参考書には記述されていなかったり記述が詳しくなかったりする言語事実を明らかにする。

(4) 上記 (1)(2)(3) によって得られたデータ

と情報については、研究代表者と研究分担者の間でその都度、連絡をとって提供し合う。

(5) 上記 (1) (2) (3) で得られたデータと情報について検討するとともに、思索中の研究代表者及び研究分担者自身の考えについて意見交換を行う。

(6) 思索中の研究代表者及び研究分担者自身の考えについて他の多くの研究者と議論し、また助言を仰ぐ。

4. 研究成果

(1) 研究代表者の塚本と研究分担者の堀江は、共同して、これまでの両者それぞれの研究成果を踏まえた上で、文法化をはじめとする日本語と朝鮮語の対照言語学的研究の現状を検討して考察するとともに、言語学におけるこの分野の今後を展望した。

(2) 研究代表者の塚本は、日本語と朝鮮語の間の相違を引き起こす根本的な要因として次の点が導き出せることを明らかにした。

日本語では、文法化が生じている言語現象が比較的多いのに対して、朝鮮語では、文法化が生じている言語現象が比較的少なく、両言語間で文法化の進度の違いがある。

朝鮮語は、基本的には語と節・文の地位を区別する仕組みになっているのに対して、日本語は、語と節・文が重なって融合している性質のものが存在する仕組みになっている、といった両言語間における形態・統語的仕組みの違いがある。

また、両言語間における文法化の進度の違いは、さらに根本的な要因である形態・統語的仕組みの違いと強く結び付いており、これに起因した結果のものがある。

文法化は、このように形態・統語的仕組みが大いにかかわっている。

(3) 研究代表者の塚本は、これまで約 30 年間にわたって行ってきた研究で得られた成果を著書にまとめて出版したが、これらの研究成果の一部として、上記 (1) (2) も含まれている。

(4) 研究代表者の塚本は、上記 (2) で述べた形態・統語的仕組みの基本的性質として次のことを明らかにした。両言語間における形態・統語的仕組みの違いは、次の 2 点が影響を及ぼしており、一要因となっている。1 点は、文法体系における動詞連用形の位置づけが両言語間で異なる、ということである。動詞連用形は、朝鮮語では先行する節・文が一旦中止しながらも、後続する節・文にかかっていき、両者が接続される、といった用法が基本的であるのに対して、日本語ではそういった用法以外に、いろいろな文法現象に姿を現し、多様な用法を有する。もう 1 点は、動

詞の接続形式の一つである中止形の種類が両言語間で異なる、ということである。日本語における動詞の中止形は (A)「動詞連用形」と (B)「動詞連用形 + 接続語尾『て』」の 2 種類である。一方、朝鮮語では、動詞の中止形は、日本語の場合と同様である (A)「動詞連用形」と (B)「動詞連用形 + 接続語尾 se」の 2 種類に加えて、(C)「動詞語幹 + 接続語尾 ko」と (D)「動詞語幹 + 接続語尾 mye」の 2 種類もある。

(5) 研究代表者の塚本は、特に日本語の複合格助詞「～にとって」とそれに対応する朝鮮語の表現に着目して考察し、文法体系における複合格助詞と単一格助詞の位置づけについて次のことを明らかにした。

朝鮮語では、日本語の単一格助詞「に」に対応する単一格助詞 ey; eykey あるいは単一格助詞 hanthey を用いて表現できるところを、日本語では単一格助詞「に」のみでは表現しきれない。

日本語の複合格助詞「～にとって」は、それに含まれている「とる(取る)」という動詞が元々有する 奪取 という実質的な意味が失われ、 関係 という意味に転じてはいるものの、その動詞が有する意味により、単一格助詞「に」のみでは表現しきれないところをカバーしている。

朝鮮語の単一格助詞 ey; eykey は、文法体系の中心を占め、安定した様態となっているのに対して、日本語の単一格助詞「に」は、文法体系の中心からやや外れ、不安定な様態となっている。

上記 における両言語間の相違は、上記 で指摘した両言語間の文法化の相違が大いにかかわっている。

(6) 研究代表者の塚本は、特に日本語と朝鮮語における複合動詞の相違点に着目して考察し、次のことを明らかにした。

日本語の複合動詞には、後項主要部タイプの形態構造の場合と、前項主要部タイプの形態構造の場合があり、日本語においては、そのいずれの場合でも複合動詞として成立する。

朝鮮語では、後項主要部タイプの形態構造の場合には複合動詞として成立するのに対して、前項主要部タイプの形態構造の場合には、非常に限られた少数のものを除き、複合動詞としての成立が不可能である。

上記 は、新影山説に基づき、日本語と対照しながら朝鮮語の複合動詞について考察することによって導き出された帰結である。

上記 にかかわる日本語と朝鮮語の間の相違は、これまで諸言語現象について考察して明らかにした、文法化を誘発する根本的な要因の一つとなっている「形態・統語的仕組みの違い」に依拠していると考えられる。

日本語における 交替・交換 を表す複合動詞「～替える」とそれに対応する朝鮮語の表現にかかわる両言語間の相違についても、新影山説に基づいて適切に記述・説明することが可能となる。

(7) 研究代表者の塚本は、日本語と朝鮮語について特に両者の類似点と相違点を中心に記している解説書を共著書として出版したが、この中には、上記 (5) (6) の研究成果も盛り込まれている。

(8) 研究分担者の堀江は、従属節の主節化については両言語ともに生産的であるのに対して、主節の従属節への浸透現象については朝鮮語よりも日本語の方が生産的であることを明らかにした。

(9) 研究分担者の堀江は、日本語と朝鮮語におけるいろいろな形態や構文を取り上げ、それらに生ずる文法化について考察した結果、次のことを明らかにした。

日本語と朝鮮語の文法化のプロセスのどこまでが平行しており、どのような相違点があるかを明らかにすべく、両言語の文末名詞化構文(例:「のだ」)の機能拡張を言語類型論及び対照言語学の観点から分析した。

両言語の連体形(例:「みたいな」)が定着して文法化するプロセスに着目し、連体形が終止形化することでどのような語用論的機能を獲得するに至っているかを歴史語用論の観点から分析した。

両言語の受働動詞(「もらう/patta」)の補助動詞化の過程について機能類型論の観点から分析を行った。

「見る」という動詞が抽象的な事態の発生を表す構文を構成している現象(例:「実現を見る」)に着目し、考察した。

(10) 研究分担者の堀江は、日本語と朝鮮語における主節と従属節の関連性について考察した結果、次のことを明らかにした。

日本語と朝鮮語における従属節と主節の相互関係、及び従属節のうち、特に名詞化を伴う文末の構文に着目すると、従属節と主節の間に双方向の機能拡張現象があるが、朝鮮語よりも日本語の方が双方向で機能拡張が生産的になされている。

日本語と朝鮮語における文末名詞文の談話機能やモーダル機能について分析を行うと、談話においては、日本語の「の(だ)」、朝鮮語の“kes(-ita)”が最も生産的に用いられるが、前者には、後者に見られない機能として、会話参加者が相互に同じ文末名詞文を繰り返して使用することにより連帯感・共感を強化する、といった現象が見出される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

堀江薫, 2014, 「言語類型論・対照言語学から見た日本語複文研究の動向と課題」, 『日本語複文構文の研究』, pp. 545-558, ひつじ書房, 査読あり

堀江薫, 2014, 「主節と従属節の相互機能拡張現象と通言語的非対称性」, 『日本語複文構文の研究』, pp. 673-694, ひつじ書房, 査読あり

堀江薫, 2014, 「文末名詞化構文の相互行為機能 日韓語の自然発話データの対照を通じて」, 『解放的語用論への挑戦』, pp. 33-55, くろしお出版, 査読あり

塚本秀樹, 2013, 「日本語と朝鮮語における複合動詞としての成立・不成立とその様相 新影山説に基づく考察」, 『複合動詞研究の最先端 謎の解明に向けて』, pp. 301-329, ひつじ書房, 査読なし

塚本秀樹, 2013, 「文法体系における複合格助詞と単一格助詞の位置づけ 日本語の複合格助詞『～にとって』とそれに対応する朝鮮語の表現をめぐって」, 『形式語研究論集』, pp. 339-366, 和泉書院, 査読なし

堀江薫・塚本秀樹・沈力, 2013, 「日本語文法学界の展望: 対照研究」, 『日本語文法』13巻1号, pp. 151-158, 日本語文法学会, 査読あり

Horie, Kaoru. 2012. The Interactional Origin of Nominal Predicate Structure in Japanese: A Comparative and Historical Pragmatic Perspective. *Journal of Pragmatics*, 44, pp. 663-679. Elsevier. 査読あり

塚本秀樹, 2011, 「韓国語との対照」, 『はじめて学ぶ日本語学 ことばの奥深さを知る15章』, pp. 236-256, ミネルヴァ書房, 査読あり

Horie, Kaoru. 2011. Versality of Nominalizations: Where Japanese and Korean Contrast: Diachronic and Typological Perspectives. *Nominalizations in Asian Languages*, pp. 473-497. Amsterdam: John Benjamins. 査読あり

[学会発表](計12件)

塚本秀樹, 「日本語と朝鮮語における語と節・文の間 対照言語学からのアプローチ」, シンポジウム「名詞的表現の機能に関する対照言語学的研究」, 2014年1月11日, 麗澤大学言語研究センター
吳守鎮・堀江薫, 「韓国語の文末名詞化構文“-tanun-ke(s)”の文法的意味: 他の文末名詞化構文との対照を通して」, 関西言語学会第38回大会, 2013年6月9日, 同志社大学今出川キャンパス

塚本秀樹, 「日本語と朝鮮語における複合動詞としての成立状況 影山(2012)に基づく分析」, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」研究発表会, 2012年9月24日, 東北大学片平さくらホール

塚本秀樹, 「日本語と朝鮮語の対照研究: 文法化と形態・統語的仕組み」, 対照言語学連続講演会, 2012年5月26日, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科

安ヘリョン・堀江薫, 「恩恵の受領を表す動詞の意味分化: 日本語の『もらう』と韓国語の『patta』との対照から」, 日本語用論学会 2012年度年次大会, 2012年12月1日, 大阪学院大学

呉守鎮・堀江薫, 「韓国語の文末形式『kes-ita』の文法的意味と分割可能性: 文法化の観点から」, 日本言語学会第145回大会, 2012年11月25日, 九州大学

Koyomi, T., Kaoru Horie, and H. An. The Abstract Noun plus 'See' Construction in Japanese and Korean: Language Contact and Semantic Extension. The 22nd Japanese/Korean Linguistics Conference. October 13, 2012. National Institute for Japanese Language and Linguistics.

An, H. and Kaoru Horie. The Grammaticalization of a Korean 'Receive'-Verb *Badda*: A Contrastive Study with Japanese. The 5th International Conference on New Reflections on Grammaticalization. July 19, 2012. University of Edinburgh.

Horie, Kaoru. A Comparative Typological Study of "Convergent" Grammaticalization Pathways between Japanese and Korean: With English as a Neutral Bystander. Spring Forum at the English Linguistic Society of Japan. April 22, 2012. Konan University.

塚本秀樹, 「日本語と朝鮮語の複合動詞研究における問題点(続)」, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」研究発表会, 2011年12月24日, 関西学院大学梅田キャンパス

塚本秀樹, 「日本語と朝鮮語の複合動詞研究における問題点」, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」研究発表会, 2011年5月22日, 関西学院大学梅田キャンパス

堀江薫, 「『主節現象』と『従属節の主節化』から見た日本語の特徴: 他言語との比較を通じて」, 日本語文法学会第12回大会, 2011年12月3日, 東京外国語大学

〔図書〕(計2件)

沖森卓也・曹喜澈・塚本秀樹他, 2014, 『日本語ライブラリー 韓国語と日本語』, pp. 160, 朝倉書店

塚本秀樹, 2012, 『形態論と統語論の相互作用 日本語と朝鮮語の対照言語学的研究』, pp. 500, ひつじ書房

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等
該当なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

塚本 秀樹 (TSUKAMOTO Hideki)
愛媛大学・法文学部・教授
研究者番号: 60207347

(2) 研究分担者

堀江 薫 (HORIE Kaoru)
名古屋大学・国際言語文化研究科・教授
研究者番号: 70181526

(3) 連携研究者

該当なし